

クロス×トーク 「ここまでわかった!?和同開珎」

パネラー：松村 恵司氏(奈良文化財研究所 所長)
森 明彦氏(関西福祉科学大学 名誉教授)
永井久美男氏(兵庫埋蔵銭調査会 代表)

開催日：2018年11月17日

会場：黒川古文化研究所 講演室

進行：川見 典久(黒川古文化研究所 研究員)

川見

今回の展観では、日本の古代銭に焦点を当てた展示をしております。クロストークということで、考古学、文献史学、貨幣学の方面から各先生にお集まりいただきました。「和同開珎」は、私が小中学生のころには「わどうかいほう」と読むように習いましたし、日本最初の貨幣だと教わったと記憶しています。しかし、現在では「わどうかいちん」が一般的になり、ひとつ前に富本銭というものがあると教科書にも書かれています。ここ二、三十年で、どのように古代銭の研究は進んできているのか、どこまでがわかっていて、何がわからないのか、そういったところを三人の先生方にお聞きできたらと思っています。



和同開珎の誕生

川見

そもそも『続日本紀』には、和銅元年(708)五月に「初めて銀錢を行う」、八月に「初めて銅錢を行う」とあって、和同開珎という言葉は一切出てきませんが、ここに見える銀錢、銅錢がなぜ和同開珎と言えるのでしょうか。また、考古学や文献史学ではどのように考えられてきたのでしょうか。

松村

和同開珎の発行より前、『日本書紀』天武十二年(683)の記事に天武天皇が「これ以降銅錢を使いなさい。銀錢を使ってはいけない。」と命じたとあります。この銅錢と銀錢とは一体何か。江戸時代以来近年まで論争が続き実体がわかりませんでした。それが、1999年に飛鳥池遺跡という飛鳥中枢部の工房遺跡の発掘調査で「富本銭」というお金が大量に出土し、一緒に出てきた土器や木簡などの年代から683年頃のお金とわかり、天武天皇が使えと言った銅錢がこの富本銭であるとわかりました。

708年に武蔵国秩父郡から和銅が献上されて、「和銅」という年号に改元され、二月に「催鑄銭司」

という役所を置いて五月にはじめて銀銭を発行します。それから七月に近江国に銅銭を鑄造させ、八月にはじめて銅銭を行う。『続日本紀』にはこう書いてあって、このときに発行したお金が和同開珎とは書いてありません。ですから、このときの銀銭・銅銭が何かということもずっと議論になっていて、和銅元年に発行したお金は、「わどう」という音が通じるから銀銭と銅銭がある和同開珎だろうと推測されてきました。ところが明治二十年代後半から三十年代前半に、この銀銭・銅銭と天武十二年の銀銭・銅銭を同じものとする「和同開珎天武朝創鑄説」が登場し、和同開珎は天武朝につくられたという説が、太平洋戦争が終わる頃までの主流な説になりました。戦後になって(奈良時代の都である)平城宮・平城京の発掘調査が本格化すると、そこから出てくるお金が和同開珎だとわかり、和同開珎が天武朝までさかのぼれないということと、和銅元年に発行されたお金は和同開珎であるということが考古学的にも証明されたという研究の流れをたどります。

川見

和同開珎には「古和同」「新和同」という型式や分類があるとされていますが、研究所蔵の古和同とされるものを見ましても、失敗品や勝手につくった「私鑄銭」なのではないかと思えてしまいます。厳密には古和同とはどのようなものなのでしょうか。

永井

古和同や新和同というのは江戸時代から古銭家が使ってきた用語で、文献上の和同銭には銀銭と銅銭しかありません。見ていただくと、新和同はまっすぐ線を引いたような文字ですね。古和同は新和同と比べると、線がゆがんでいるような、できそこないのような印象です。価値が違うのであればそれでまだ議論になると思いますが、銅銭一

枚は新和同も古和同も一緒です。問題は、出土資料の数が大きく違う点です。奈良文化財研究所のホームページでは発掘された和同開珎のデータが公開されていて、全国で集成すると、銀銭は現在51枚あります。古和同の銅銭は何枚あるかといえればわずか6枚です。古代の遺跡ではわずか6枚、それも藤原京と平城京、それと大阪市天王寺区の細工谷遺跡からしか出てきていないわけです。

松村

古和同というのはつくりがやや稚拙だということで古和同と言われていますが、遺跡から出土する和同開珎のほとんどは新和同もしくは普通和同と言われているものです。どこが違うかというところ、「開」字の門構えの上端が隸書風に開いています。古和同は上端が閉じていて、「不隸開」、つまり隸書風の「開」ではないという風に言うのですが、今の「開」という字とまったく同じですよ。隸開か不隸開かというのが一番大きな違いです。

隸開

不隸開

川見

古い、新しいという年代を評価する用語になっていますが、古和同が本当に新和同より古いというのは、考古学的に証明されているのですか。

松村

研究史の上でも、(新和同の方が古いと考える)逆転した説が再三出されています。でも最近、金属の成分分析をしたところ、富本銭というお金は銅とアンチモンの合金でした。アンチモンという

のは昔の活字に用いられた金属で銅に混ぜることで合金の融点が下がり、低い温度で鑄造できます。新和同は銅と錫の合金で、いわゆる青銅ですね。新和同は青銅、富本銭はアンチモン合金。古和同を分析するとやっぱりアンチモンが入っています。富本銭からアンチモンの入った古和同、それから銅と錫の合金の新和同に移っていく。そういうことは成分分析からも証明できます。

川見

森先生、文献の方ではどう考えられるのでしょうか。

森

井上正夫さんは、この字（隸開）をつくってみたら、唐の開通元宝（＝開元通宝）と違う字になったので、これ（不隸開）に似せたのだと言っています。私は、古和同の「開」字が誤ってしまったのだと考えています。間違っただけを書き直したので、間違っていない字にしたと。つまり「開」というのは、交易の時に有るところと無いところとを流通させるわけですね。その障害を開通するという意味もあるのですが、本来開いているべき「開」字が閉じてしまっていますよね。これは、唐に対抗して日本独自の「弥」や「開」を入れているわけですが、独自性を出そうとしすぎたために、肝心の「開」字が閉じるという誤りになってしまった。それで信用があまりない銅銭はなかなか流通しないとか、銀銭では贗物らしいのがどうもありそうだとのことですが、私鑄されるということが起きた。字が間違っていたために変なことが起きたのだらうということで、この「開」字（隸開）になった。今度はちゃんと開いていますから交易の道が開いて流通、開通するようになった。これは後付けの説明ですが、文献から見ればそういうことです。

松村

開元通宝と新和同というのは本当によく似ています。裏返したら見分けがつかないとよく言われます。それほど中国のお金を模して精巧にできたお金が新和同ですから、字も完全に開元通宝の「開」字をまねている。それ以前は、国際情勢も絡んで中国のお金づくりの技術なども導入できなかったということが背景にあるのではないかと私は考えています。

川見

古和同は新和同と比べると技術的に劣るように思うのですが、これは新和同をつくるまでの間の実験段階とか、過渡的なものと考えたらよいのでしょうか。

松村

古銭界でもその辺はずっと議論になっていて、養老五年（721）に中国の工人を連れてきて新和同をつくらせたというのが通説になってきたのですが、何の根拠もありません。それほど開元通宝と似ているから、そういう風に言われてきたということもあります。技術革新は新和同のときには当然あるのですが、それがいつなされたのか、和銅四年なのか五年なのか、あるいは銀銭を廃止した三年なのか。その辺はまだよくわかってないというのが実情ですね。

永井

古和同の銅銭がわずか6枚しか出ていないと言いましたが、和銅二年に（銀銭の）鑄造を止めて、三年にはその流通を停止するという記事が『続日本紀』の中には出てくるわけです。そうすると、もっと古和同の銅銭が出土しないといけません。出てこないことイコールつくっていないことではないと思いますが、あまりにも少なすぎる。それに藤原京と平城京の辺りしか出てきていませ

ん。細工谷は変わった遺物なので、同じように論
じることはできないですが。律令国家は銀錢をや
めて銅錢に一本化をするわけで、新和同はいつば
い出てきます。なので、新和同の鑄造がこれまで
の想定よりも早いのではないかと私は最近思っ
ています。最短で言えば、近江国で和銅元年七月に
つくったのが新和同かもしれないとも考えられま
す。それは発掘資料をもとにして文献と合わせて
いくとわかりやすいのではないかなと。(出てく
る古和同が) あまりにも少なすぎて、そういうこ
とを最近思っております。

松村

それには反論もありまして、銅錢は鑄つぶして
新しいお金をつくりますよね。ですから古いタイ
プのお金はどんどん鑄つぶされて残りが少なく
なっていくというのも一因であろうと思います。
それに対して銀は非常に貴重ですから、銀錢は和
銅三年に禁止されてしまうけど、銀は地金価値が
ありますからみんな使わずに蓄えるわけです。そ
ういう形で銀錢は残っていくけれども、銅錢の方
は回収されて鑄つぶされたのが出土数の少ない原
因ではないかなあと。和銅二、三、四年ぐらいが
ひとつの転換点ではないかと思いますが、皆さん
もこの辺を研究していただいたら非常に面白い
テーマだと思います。

森

和銅元年七月に「近江国をして（銅錢を鑄せし
む）」ということで、八月に「始めて銅錢を行う」
とあって、これが古和同だと考えられます。それ
で、和銅二年正月、三月の記事辺りでちょっと古
和同の様（ためし、仕様）が変わって、八月では
「銀錢を廃してもっぱらに銅錢を行う」というこ
とで、このちょっと前に、新和同が大量に鑄造さ
れたのだと考えています。ですから、古和同の銅
錢というのは一年も鑄造してないし、この間の国

家にとって一番重要なお金は、銅錢じゃなくて銀
錢だったのではないかと考えています。だから、
つくられた数はわかりませんが、やはり少なかっ
たのではないかと思います。

質問者

今そこに出ている画像には「古和同」と書いて
ありますが「開」字は開いていますよね。それは
どういうことですか。

松村

古和同の中でも最後の頃はこのように開いた
「開」があって、「隸開古和同」というさらに珍
しい古和同です。一般的な古和同ではありませ
ん。ただ、これは藤原京から発掘された古和同で、
710年には都が平城京に移りますから、708年か
ら710年までにつくった古和同であることが証明
されています。ただ見た感じはやはり新和同とは
少し違いますよね。先程の説明ではちょっと足り
ませんでした。古和同の中にも最後には隸開の
古和同があると、そういうことです。

川見

「隸開古和同」と新和同の「開」字は一緒とい
うことですが、古和同と新和同の明確な違いはな
いのですか。雰囲気としては確かに、線が太いな
どあるとは思いますが、考古学の分類として型式
を分けるほどの違いというのはどこになるので
しょうか。

松村

孔が広いというのと、縁が幅広であるというこ
と、それから字体がそれぞれぼてっとしています。
新和同は本当に定規で引いたように字が直線的な
のですが、古和同の方はそこまでいっていないと
いうところですかね。やはりこれ（隸開古和同）
も分析するとアンチモンが入っています。

質問者

古和同の銅銭が鋳つぶされたのではないかという話がありましたが、新和同だと合金の成分が違うのですよね。だとすると、鋳つぶされた後、何に使われたのでしょうか。

松村

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）で皇朝十二銭を成分分析した研究がありまして、万年通宝にアンチモンが多い一群があるという結果が出ています。これは古い時期のお金、古和同とか富本銭を回収して鋳つぶしているのではないかという説です。

森

高橋照彦さんの説で、古和同、神功開宝のアンチモンの包含からそういうことを言っておられます。ただ、新和同でもアンチモンが出ることは若干ありますし、鉛の同位体分析からすれば神功開宝と古和同はだいぶ違います。万年通宝とか神功開宝のときなどに、私鑄銭をつくっている人間を大量に牢獄から連れ出してきて、新しく神功開宝をつくるときに使役しています。そのときに「白鑢」、多分アンチモンですが、これを使っているという史料がありますので、高橋さんのおっしゃっている説は成り立たない、古和同が鋳つぶされて神功開宝や隆平永宝がつくられたのではない、と私は考えています。やはり少なかったのではないのでしょうか。和銅二年の三月頃、和同開珎に関して問題が起きているときに、古和同の不隸開から隸開に変わって、それでも問題があったから新和同になったのではないかと考えています。これは想像の域を出ませんが、神功開宝の時代まで大量に残っていたことはないだろうと思っています。

永井

ちょっと関連することで、歴博での鉛同位体の成果を見たときに、なぜこれを発掘品でやってくれないのかと思いました。そのときは歴博と貨幣博物館の蔵品でやっていましたが、コレクション品でそれを示されても基礎資料になりません。コレクション品が全部だめだと言っているわけではなくて、指標となる資料をつくるのであれば、実際に出土した資料を使わないと基準になりません。

松村

ただ、鉛同位体の分析っていうのは少し削って資料を採集しないとデータがとれないんですよね。発掘した貴重な出土品に穴をあけて分析するというのは抵抗があります。非破壊でわかるのが理想なのですが、今のところは破壊分析になってしまうので、発掘品・出土品でそういった鉛同位体分析を直接やるというのは非常に難しいと思います。今、森さんと私とで意見が違うようですが、貨幣学、古代史、考古学と意見の違いがあるのがまた面白いところです。

和同開珎の製作工程

川見

次の話題に行きまして、今回の展示では平城京で発掘された鋳型など、和同開珎の製作に関わる資料を展示していますが、『続日本紀』などには平城京内で貨幣をつくっていたことは出てこないと思います。実際に出土している鋳型などで流通銭をつくっていたのか、あるいは私鑄銭であるという説もあるかと思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

松村

文献資料によると「鑄銭司」という役所でお金をつくるというのが決まりなのですが、平城京を発掘したら左京三条四坊七坪の発掘調査で和同開珎の鑄型と失敗品が出てきました。贋金をつくると「斬」（死罪、打ち首）と書いてあるのに、平城京内で鑄型が出たので、お膝元で贋金づくりをしたのではないかということが発見直後に面白おかしく喧伝されました。ただし、この鑄型の直径が普通より大きいことを永井さんがはじめて指摘されたのですが、どうもこの鑄型からは普通の流通銭よりも大型のお金ができ上がってしまう。大型のものをつくってそれを粘土に押し付けて鑄造すると鑄縮みがかかりますから、そうすると通用銭（の大きさ）になる。この三条四坊七坪にあったのは、「種銭」の鑄造工房だったということがわかってきました。種銭というのはお金をつくる原型で、通用銭ではありません。どうやら文献には出てきませんが「鑄銭寮」という機関の管轄している工房でつくった種銭を、長門の鑄銭司などに一括して送って、それをもとに大量生産していくというシステムがあったのではないか、その一端を示すのがこの三条四坊七坪の平城京内の工房であろうと考えています。これは、永井さんの計測によって問題が解決された事例です。

永井

和同銭は長門でつくっていたということですが、結局必要になるものは種銭ですよ。種銭をつくらないと量産できません。江戸時代では、寛永十三年（1636）に寛永通宝をつくります。渡来銭から寛永通宝に切り替えるときに、幕府は仙台から九州の竹田まで十何か所かでお金をつくって、それを江戸に運ぶのではなくて、（早く）流通させるために現地で払い下げをしました。寛永から明暦期につくっている寛永通宝では、厚みを意識していると私は思います。それまでの渡来銭

時代、日本で出土する16世紀末から17世紀初めのお金は粗製乱造で薄いのです。堺環濠都市遺跡には慶長十五年（1610）に埋められたとされる6,325枚の出土銭があるのですが、その中に70枚の慶長通宝が入っていました。それを計測したら小型で薄いもののがかなり含まれていました。幕府が新しいお金をつくる時には分厚くつくったのですが、大きさや厚みがばらばらのもののができた。そのため寛文期には江戸・亀戸（鑄銭所）の一箇所です。それが文銭です。裏に「文」の字。これを100枚とか1,000枚とか並べたら、くっついて棒のようになりますよ。そうすると、和同銭は古代のお金ではありますが、同じ規格の種銭を供給をしないとばらばらなものができるのではないかと、という発想が私の頭の中にあっただけで、平城京内で種銭をつくるということは往々にしてあるのではないかと考えました。

川見

今前に映しているのが、唯一和同開珎の種銭、母銭じゃないかと言われているものですが、鑄造の遺跡から出てきたわけではないですよ。

松村

そうですね。これは平城京の左京三条二坊という、長屋王邸のあった場所から出た母銭です。普通の通用銭の平均の直径が24.5mmですが、このお金は直径が25.9mmで二回りほど大きいのです。拡大してみると、（字の周りを指しながら）全部鑿で削った痕跡があります。ですから、最初に木製のお金をつくってそれを鑄写して、それで鑄写しがうまくいかなかったので、さらに鑿で字の縁を削って、これを母銭にしてさらに写す。二段階ほど鑄写することによって種銭ができて、三条四坊七坪の工房で種銭をつくった。それを長門の鑄銭司に送って、それでお金を大量に生産する。要するに、お金が全国に流通するためには規格性が高く

なければならなかったのです。不揃いだったならば、皆出来のいいお金を選んで使おうとするのでうまく流通しません。いかに規格性が高くても均一なお金を大量生産するかというのが、お金が流通する基本原則です。そのために、色々な工夫をしながら種銭をたくさんつくって長門の国まで運び、そこでつくらせれば、中央が統括しているのですから、どこの鑄銭司がつくっても規格性の高いお金ができます。種銭の供給は古代のお金づくりの知恵と工夫です。

川見

母銭、種銭というのが、鑄型をつくる前段階で想定されていると思うのですが、平城京から出た鑄型の中に一点、銭と同じ凹凸になっているものが出ています。通常、銭と鑄型は凹凸が逆になっていますが、これは鑄造のどういう段階で使われたものだと想定できるのでしょうか。今回展示している中には、中国の「模」という、それを転写して鑄型をつくるためのものがありますが、そういったものではないのでしょうか。

松村

これは非常に貴重な資料で、今のところ出ているのはこの一点だけです。これも発見したのは永井さんですので一言。

永井

奈良郵便局のところからの発掘ですね。箱に入っていた鑄型を全部見ていくと、一点だけこれが出てきました。見てすぐに、これ正位置じゃないかと。これで銭にできるのかなということになるわけで、それからずっと考えていましたが、これを使って型をつくるとしか考えられません。先週の鑑賞講座でこういう話が出てきたのですが、(講師をつとめた)石谷さんどうですか。

石谷

型をつくるための型、中国では「模」と呼ばれるもの、日本語では「原型」という言葉がふさわしいと思いますが、それであることは間違いのないと思います。ただ、こういうものが鑄造施設から出ている一方で、皆さんがおっしゃっているように母銭とされるものが存在する。両者の関係をどう考えたらいいのがひとつポイントだと思います。

松村

これに銅を流して銅の鑄型をつくったら、それで鑄造できますか。

石谷

中国では、五銖銭の模に銅を流し込んで銅の鑄型を得て、その表面に型離れをよくする墨などを離型剤として塗って、銅銭を鑄造するということは行われていたようです。私はこの原型と一緒に出ている鑄型も検討させていただいたのですが、銭文までそっくりで大きさも一致するということが気がつきました。なので、もしかするとこれは銅を流し込んだのではなくて、この原型に粘土を押し当てるようにして鑄型を得たのではないかと考えています。

松村

私も後者であろうと思っています。でも、中国の例を見ると銅銭の鑄型をつくった可能性もあるので…。今日、長門で鑄銭司跡を発掘調査されている濱崎さん(下関教育委員会)が来られています。和同開珎の鑄型などをたくさん掘られている方ですけども、この存在は知っていましたか？

濱崎

実見は今回がはじめてでしたが、存在だけは存じておりました。

松村

これはおそらく、中央でこれを用いて種銭をつくり、その種銭を長門の鑄銭司に持って行って、そこで鑄型に押し付けて大量生産していると思うので、長門ではおそらく出ない資料だと思うのですが…。

濱崎

今のところ類例は確認しておりません。

質問者

この鑄型は使いすぎて摩滅しているという可能性はないのですか？使った型なのですか？

松村

表面がちょっと風化していますよね。ただ、ここ（銭の縁に沿って）に黒く焼けた跡があって、文字もありますから、何回か鑄造しているとは思いますが…。

石谷

ただ、銅を流し込んでいるから黒くなっているかどうかは何とも言えません。離型剤の痕跡だとすれば、粘土を押し当てるために何かを塗ったという可能性もありますし、その辺りはこれから（成分）分析などをしていただければと思います。



和同開珎の流通

川見

最後のテーマということで、和同銭がどれくらい流通していたか、そもそも流通銭なのかということもあるかと思います。さきほど永井さんは寛永銭の話をして、全国でつくって、それをそのまま現地で流通させるという話がありました。例えば、和同開珎の場合だと、大きな製作地として長門があると思います。九州に流通させるつもりならば、長門から直接大宰府に納品したほうが早いように思えるのですが、お聞きすると、そうではなくて、一旦都に送られるという話でした。先生方は三名ともそう考えておられるのでしょうか。

森

流通と言った場合、いろいろと考えなければならぬ問題があります。極端なことを言いますと、和同開珎というのは、都と難波とか京畿内の辺りで交換・流通していればいいというもので、古代国家には全国に流通させる気はなかったと私は考えています。ただ、雇役丁とか地方からさまざまな物資を持ってくるために、地方豪族がお金を持つ、あるいは人脚などにお金を持たせる必要はある。ただ、地方に持って帰っても、律令国家は蓄銭叙位法でそれを全部回収するか、都で使ってもらうということをする。あるいは往還のときにお金を持たせて国家が都ごとに別置した米と交換してそれを全部使う。全国に流通させる気は全然なかった。それはもう奈良から平安時代にかけてそうだと思います。ただ、国の政策はそうであっても、やはり和同開珎などは便利ですから、一旦その味を占めた豪族などは使おうとする。都から商人なんかが、そういう人たちの家に様々な品物を持って売りに来る、そこでお金が使われるといっ

たような流通は全国的にあったかもしれませんが、例えば地方の市場なんかで和同開珎が使えることはなかったと考えています。地方の財政の報告書である正税帳に、和同開珎が全然入っていないです。もし律令国家が全国的に流通させようとするならば、地方の、今でいう県庁などで和同開珎を使うという財政運用をしたらいいわけで、そういうことは一切やらない。律令国家はやはり和同開珎というものが流通して貨幣経済になること、地方でそういうことが起こるのを警戒していたのだらうという風に考えています。ですから、どちらかという今までの文献史学の人たちが、例えば蓄銭叙位法とか和銅五年条などを全国に流通させようとしたものと考えていたのに対して、私は全面的に反対というか、史料を読み間違えているのだらうと考えています。

松村

まず和同開珎一文の現代の価値がどれくらいかということをお話してもいいでしょうか。租庸調という税の制度があるのですが、庸とか調は、十日分の労役に値するものを中央に運ぶというものです。規定では、庸布は長さ1丈3尺(3.9cm)の「常布」二常を国に納めることになっていました。和銅五年に一常の価値が銅銭五文であると定められています。ということは、五日分の功賃に対応する常布は五文だから、和同開珎一枚分の値というのは、一日分の功賃、今でいうと8,000円前後でしょうか。銀銭と銅銭の関係は森さんや私の研究によると銅銭十文が銀銭一枚になります。

森さんは全国流通を目指さないのは国の方針だと言いましたが、私はそうではなくて全国流通は目指しているけれども、発行量とかその辺の限界があって、全国流通はしていない。ただ、全国から租庸調という現地の特産品を都まで運ぶのが納税者の義務だったので、皆、実際の荷物を担いで平城京まで納税の旅をしました。例えば武蔵国か

ら平城京まで片道歩いて三十日かかります。そのときに食料を持って旅すると、税を十分に運ばないですね。そこで食料ではなくお金を持って税を運ばせるようにした。その代わりにお金があれば、往還の途中で郡の役所が保管しているお米、郡稲を道端でそういう運脚夫に売りなさいという命令を出しています。また、税を納めて帰るときが飢えて一番苦しい時期ですが、そういうときに地域々々のお金持ちに、何石お米を売ったら位階をどういう風に上げるといって、蓄銭叙位令と同じような優遇策をとって、帰郷する運脚夫や役夫たちが飢えることがないようにお米を売る制度もありました。旅する人間にお金を持たせるということをやらせるのです。ですから、6,300枚のお金は現在、畿内中心に七道の道路沿いに出てきます。それを見ると、少なくとも道路沿いには通用していたけれど、面的に全国まで流通が広がるのではなくて、道路沿いに流通していたとみられます。地元で得たお金を地方豪族たちがかき集めて、蓄銭叙位令に従ってお金の蓄積を図った。(全国各地で)そういう世界があったのだらうと私は考えています。その点では森さんと少し考え方が違います。

永井

私の方からひとつ関連する話をしておきますと、先程の発掘資料というもので、古代銭の集成を出土銭貨研究会でも2000年にやったのですが、その時に全国で15,000枚余り、無文銀銭、富本銭から軋元大宝まで、古代銭は15,284枚出ています。畿内に近江国を足すと、78%がこの地域から出ています。1,000枚以上出ているのは、三つの国しかなくて、一番多いのは大和で、4,571枚出ていました。その次が山城で3,166枚です。そして、近江国が2,230枚です。松村さんが追加した資料が奈良文化財研究所のホームページで和同銭だけは公開されていますが、現在だと17,000枚は越えて

いると思います。街道沿いにずっと行くと、980枚出ている加賀国があります。加賀には、和同開珎が約600枚一度に出てきている三小牛サコヤマ遺跡があります。加賀国というのは古代銭がわりとよく出ます。このような発掘資料は流通を少しは反映しているだろうと思っています。四、五年前から私がやっていた最新のデータを出すと、長岡京で現在古代銭が807枚出ています。長岡京市、向日市、京都市の三つの行政区分になりますが、拾い出して(銭種別の)比率もわかってきました。和同銭は14%、113枚出ています(万年銭が136枚で16.9%、神功銭が399枚で49.5%)。これが長岡京から出てくるひとつのデータになるわけです。平城京ではどうだろうかとか、平安京でどうだろうかとか、そういう調査もしたらよいのですが、これをするのがまた大変です。

川見

それぞれ流通の度合いなどの考え方は違うと思いますが、都と地方とを行き来する人たちが道中でそれを使うということですね。松村先生、和同銭一文が今でいう8,000円くらいとのことでしたが、道中でお釣りが出ないですね。

松村

端数が出るとどうしようもないですが、お米の量を勘案して売ることになるのでしょうか。先程、一日分の労賃に値すると言いましたが、和同開珎の公定価値は穀(こく)、すなわちモミ付きのお米6升で一文。穀6升をお米にすると大体3升になって、これが一文。ただ気をつけなければいけないのは、古代の1升は今の1升と違っていて、今の4合が古代の1升です。そうすると、米3升が今の1升2合くらいです。要するに、1升2合くらいが8,000円の価値だったということです。しかしインフレが進み貨幣価値はどんどん下がっていきます。和同開珎を発行した時から、

万年通宝を発行したときまで、こんなに(グラフを指して)物価は上がっていく。和銅四年にお米を一斗買おうと思ったら、3.3文あれば買えるけれども、天平神護元年(765)は、和銅四年の60倍くらい物価が上がっている。こうした物価変動もありますから、一文で何合買えたかというのは年代によって異なっているのですが、ただし、年代が下がると功賃がどんどん上がっていきますから、一日働いて10文もらえたとしたら、一日働くと1.8升買える。だいたい労賃が一日2升買えるくらいと決められていたのだろうと最近わかってきています。ですから、物価が上がって飲めず食えずの生活をしているかということ決してそうではなくて、労賃も上がって一日に2升くらいの米が買えるような保証がされていたということです。

川見

今だと給料も上がっているということですね。給料も上がって物価も上がっているということは景気が良いということになると思うのですが、そういうわけではなくて、今の話だと和同銭の貨幣価値がどんどん下がっているということですよ。それは何故なのでしょう。信用がないのでしょうか。

松村

一番大事なことを言い忘れましたが、和銅元年に和同開珎を発行してから、次に760年に万年通宝というお金を発行します。その五年後には神功開宝というお金を発行します。このとき万年通宝には、「当十銭」といって和同開珎の十倍の価値を持たせます。和同開珎10枚に相当するのが万年通宝だと公定して発行したのです。神功開宝も和同開珎の十倍の価値で、次に隆平永宝を発行したときには、万年通宝の十倍の価値で流通させました。お金を発行するたびに十倍の価値を持た

せていったので、必然的に貨幣価値はどんどん下がってってしまうという負のスパイラルが生じ、物価が高騰したのです。

川見

奈良時代の後半はそういう状況になっていて、それから皇朝十二銭と言われるように延々とやりつづけたわけですね。11世紀くらいまで貨幣が続いていたとして、相当長くその状況で続けていると思うのですが、森先生、なぜそこまでして続けていったのでしょうか。

森

和同開珎を発行したときには、銀一分が和同銀錢一文で、和同銅錢10文でした。これは国家が決めた法定価値ですが、実際にその価値通りに通用していたのは国家による強制労働だけで、市などではやはり、銀一分＝銅錢10文なんてあつという間に落ちていくわけです。養老五年には銀一分＝25文、翌年には銀一分＝50文でしたかね。一年間で半分になる。養老六年には、銀一分＝50文という価値にしたけど今後物価は自由にやれということで、本音は貨幣価値がガサッと落ちることを認めざるを得なくなっているわけですね。その後ずっと、市場に任せていたのですが、万年通宝の時に当十をやる。そして、当十をやったら和同開珎の価値がほとんどなくなってしまった。そうすると、そんなものは使えませんから鋳なおすなどして万年通宝にして、万年通宝発行前の和同開珎ぐらいの価値の錢にする。しばらくしたら、和同開珎と、万年通宝・神功開宝を同価にして流通させると退蔵されていた和同開珎が大量に入ってきたということで、鋳錢司をやめて鋳造しなくなった。そして昔のことに懲りずに隆平永宝を当十でつくって…。次の富寿神宝、これは10対1かどうかわかりませんが、私は等価でなかったかと考えているのですが、あとはまた十倍ずつ

にやっていく。つまりお金を腐らせていくというようなことをやっていた。なぜ当時の権力者がそういう貨幣観を持っていたのかというのはなかなか難しい問題があって、これに関してはペンディングさせてください。よくわからないというのが結論です。

川見

最後に、貨幣の研究では今後何をしていったらいいのでしょうか。

松村

今、私が関心あるのは、6,300枚の和同開珎が全国からどういう風に出土しているのかという出土分布図をつくって、それを今度は古代の環境下でその遺跡を評価することです。その地域でお金が出ている遺跡とか、郡の役所や駅の遺跡とか、古代寺院の遺跡とか、そういう古代の歴史的な環境を復元して、その中でお金の出た遺跡を改めて評価していきたい。そうすることによって、在地でお金がどういう風に流通したのか見えてくるだろうと考えています。そうしないと、(古代錢貨は)畿内と畿内周辺でしか流通しなかったという極論や、全国流通したという極論になる。そうではなくて、実態に即して和同開珎の流通のあり方を考古学的に探る、これが私の一番の関心事です。

森

二点ありまして、ひとつは先程ペンディングした、なぜ平安時代にお金が腐っていくのかという問題です。以前、貞元大宝と同じ金属組成の和同開珎をつくって、出来上がった鉛錢を思い切り引っ張って見たらちぎれてしまったということがありました。結構しっかりした和同開珎がちぎれるということは、薄っぺらい貞元大宝はできた瞬間にぐにゃぐにゃになってしまうようなお金だったと考えられます。そんなお金をどういう気持ち

でつくったのか、しっかりした隆平永宝とか富寿神宝みたいな形になぜしなかったのか、そういう風な問題を考えてみたいです。二点目は、松村さんの研究をどんな風に使わせてもらおうかと虎視眈々と、永井さんの研究も含めて、お二人からどうやって盗もうかと思っています（笑）。

永井

私は1994年から、考古学の現場で使うための（出土銭の）手引書を6冊書きました。現場からまともな資料が上らないと研究が進展しないので、発破をかけるために6冊も書いてしまいました。そのときは、古代のお金は十何種類しかないので、わざわざ手引書をつくるほどのことはないかと思ったのです。しかし、最近、やはり必要だと思いなおしまして、近いうちにつくろうと考えています。今現場では、出土したときにどう調査したらいいのか、どうやって保存したらいいのかという問題を抱えています。鉛銭の場合はX線で撮っても真っ白で銭文も読めませんし、（脆いので）保存の事も考えなければなりません。もうひとつは、（古代の）贋金、私鑄銭とは何かなど。私鑄銭というのは流通しているお金を写すのが一番簡単です。中世や近世初期でもやっています。けれども古代のお金はあれだけ文献で出てくるのに、これが私鑄銭ですよというものを示すことができません。その研究を進めて、いずれ発表したいと思っています。

川見

この二、三十年、他と比べれば研究は相当進んだ分野ですが、それでもやればやるほどわからないことも逆にまた増えていくという状況かと思えます。三人の先生方には今後も研究を進めていただくとともに、次の世代へと続けていかななくてはと思いますので、後進の指導もぜひよろしくお願ひします。

本稿は第120回展覧「和同開珎—出土した古代銭の謎—」（会期2018年10月13日～11月25日）におけるイベントとして11月17日に開催した座談会の記録である。編集にあたっては、座談会の内容の忠実な再現を目指したが、誌面という形式を考慮し、若干の改変を加えた。

録画からの文字起こしは仁方越洪輝（京都大学大学院生）が担当し、研究員の川見と石谷が校閲を行った。編集は柴千裕が担当した。